

幸いな老い

伝道者の書 12:1-14

今日は敬老の日です。ご高齢の皆様おめでとうございます。私たちの教会では、私たちの先輩のクリスチャン、またご高齢の方々に敬意をあらわし、神の祝福を祈る、シャローム感謝会を、毎年9月の日曜日の礼拝後に持っています。コロナ禍の前はシャローム感謝食事会と言って食事を共にしながらお祝いの時を持っておりました。残念ながら今年も、食事の時は持てませんが高齢の皆さんが、お元気で、こうして一緒に礼拝そしてシャローム感謝の時を持てますことを感謝しています。

昔、敬老の日を覚えての川柳に「この年齢（とし）になったの生まれてはじめてよ」という一句がありました。確かに、誰でも、どれだけ年を重ねても誕生日がやってきて、ある年齢になるのは、いつでも「生まれてはじめて」のことで。飛び越したり、戻る人はいません。生まれて初めて誕生日に次の年齢になり、その年齢になって初めて経験すること、見えてくるものがあります。過ぎ去りし日々を思い返すのも意義深いことかと思いますが生まれてはじめて迎える（自分の年齢）の時に何かにチャレンジしていただきたいと思います。

1) 老いのありのままの姿

私たちの肉体は年齢とともに衰えていきます。ですから出来るだけからだをいたわることを忘れてはいけません。今朝の聖書、伝道者の書 12 章にも人間の体が年とともに衰えていくようすが描かれています。

2. 「太陽と光、月と星が暗くなる前に、また雨の後に雨雲が戻って来る前に」というのは年をとって体の自由が利かなくなり、心がふさいでしまう状態をさしています。毎日、毎日曇り空、雨空が続くと、誰でも憂鬱になってしまいます。3. 「その日、家を守る者たちは震え」というのは、手足のことです。体は足から衰えると言いますが、手足に力がなくなってしまう状態をさしています。「力のある男たちは身がかがめ」というのは、背骨が曲がって、体が前かがみになってしまうことです。「粉をひく女たちは少なくなつて仕事をやめ」というのは歯のことです。年をとると、歯が一本抜け、二本抜け、やがて食べ物を噛み砕くことができなくなり、やわらかいものだけを食べるようになるので、歯の仕事がなくなるということです。「窓から眺めている女たちの目は暗くなる」というのは、すぐわかりますね。これは目のことです。目の水晶体が曇って、ものがかすんで見えなくなるということです。4. 「通りの扉は閉ざされ」というのは、便通が悪くなること、「臼をひく音もかすかになり」は、食欲が衰えて、胃が食べ物をこなすことも少なくなつてをさしています。4. 「人は鳥の声に起き上がり」というのは、不眠症で、年をとると朝早く目がさめるようになることを言っています。「歌を歌う娘たちはみな、うなだれる」というのは、耳が良く聞こえなくなることを言います。年をとると聞き取りにくくなります。すると歌を歌う娘たちは歌っても聞いてもらえず、うなだれるということです。5. 「高いところを恐れ、道でおびえる」というのは老人性不安症をさします。「アーモンドの花は咲き」というのは白髪になることを意味します。アーモンドの花は冬、白い花を咲かせることからこういう比喩が生まれたのでしょうか。「バツタは足取り重く歩き」というのは活力、元気の衰えを表わします。「風鳥木」は食欲増進に役立つ植物と言われています。「花を開く」と訳されていることばは「はじける」とか「破れる」という意味があつて、「無駄になる」「役立たない」ということを表わしているようです。

なんだかかわびしい限りですが、聖書には「ですから、私たちは落胆しません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。」コリント第二 4:16 という言葉もあつて、キリストを信じる者たちは、神からいただいた新しい命によって内側はいつも新しくされていくとありますから、感謝ですね。

2) 誰でも迎える死

伝道者の書は、人が年を老いて、体が衰えていく様子を比喩で描きましたが、それだけでなく、人生の最後に死が訪れるというところまで、描き続けます。五節の後半は比喩から現実のことばに変わっていま

す。「人はその永遠の家に向かって行き、嘆く者たちが通りを歩き回る。」とあるのは、人々が嘆きながら、亡くなった人を葬るため、墓場に向かっていく様子を描いています。ここが比喩で描かれていないのは、死がどの人にも避けることのできない現実であることを、はっきりと示すためです。

六節ではふたたび比喩に戻ります。「こうしてついに銀のひもは切れ、金の器は打ち砕かれ、水がめは泉の傍らで砕かれて、滑車が井戸のそばで壊される」というのはどれも死を表わします。泉や井戸の水は命を表わしています。銀のひもに金の器をつけて水を汲もうとしても、銀のひもが切れたら命の水を汲むことができず、金の器が壊れたならその水を保っていることはできません。泉があっても水がめが壊れてしまったら、井戸があってもその滑車が壊れてしまったら、同じように、水を汲み上げることはできません。そのように、私たちは、いつか肉体の命を失ってしまうのです。これは、あまり考えたくないことですが、しかし、確かな現実です。

七節の「土のちりは元あったように地に帰り、霊はこれを与えた神に帰る。」というのには「死」とは何かを教えてください。死とは「体とたましいとが分離すること」と定義することができますでしょう。死によって私たちの何もかもがなくなってしまうのではなく、たましいは残ります。私たちのからだは、もともと土のちりから作られました。ですから、やがて土のちりに帰ります。しかし、私たちのたましいは神のもとに戻ります。だから、私たちは、死を真剣に考えなければならないのです。もし、死によって私たちの存在がすべて終わってしまうなら、考えようによっては死ぬことはあまり怖いことではありません。死が私たちの存在の終わりなら、死がやってきた時には私たちは消えて無くなります。しかし、事実は違います。私たちは死に直面し、それを体験し、そして死後、神の前に出なければならないのです。だから、私たちは死を恐いと思うのです。

3) 人生の姿

伝道者の書が、このように老年や死を克明に描いてきたのは、なぜでしょうか。それは、老年になった者たちばかりでなく、若い者にも、すべての人に、人生を真剣に考えさせるためです。詩篇に「私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。そのほとんどは労苦とわざわいです。瞬く間に時は過ぎ私たちは飛び去ります。だれが御怒りの力をあなたの激しい怒りの力を知っているでしょう。ふさわしい恐れを持つほどに。どうか教えてください。自分の日を数えることを。そうして私たちに知恵の心を得させてください。」詩篇 90:10-12 とあります。「どうか教えてください。自分の日を数えることを。そうして私たちに知恵の心を得させてください。」というのには、人生の残りの日々に限りがあり、やがて、神の前に立たなければならないということを感じていられますように」との祈りです。私たちは、自分の人生をそのように真剣に考えているのでしょうか。

伝道者の書は、人生の意味を探求し続けた人が書いたものです。「伝道者」と呼ばれる人は、今で言えば、哲学者のような人ですが、知恵、知識、富、快楽、名誉、などありとあらゆるものを追求し、人生のあらゆる事柄を考え抜いてきました。そして、彼が到達した結論がその前の 11 章 8 節からの言葉です。「人は長い年月を生きるなら、ずっと楽しむがよい。だが、闇の日も多くあることを忘れてはならない。すべて、起こることは空しい。若い男よ、若いうちに楽しめ。若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたは、自分の思う道を、また自分の目の見るとおりに歩め。しかし、神がこれらすべてのことにおいて、あなたをさばきに連れて行くことを知っておけ。あなたの心から苛立ちを除け。あなたのからだから痛みを取り去れ。若さも青春も空しいからだ。あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない」と言う年月が近づく前に。」伝道者は、若い人は若い人らしく、大いに人生にチャレンジし、それを楽しめと語っています。確かに、神は、私たちにそれを楽しむようにとそれぞれの人生をお与えくださいました。しかし、若いうちに蒔いたものは、老年になって刈り取らなければならないことを知っておく必要があります。若い時ばかりでなく、どの年代でも、人は自分の蒔いたものを刈りとらなければならないというのが聖書が示していることです。老年になって蒔いたものも、それは

やがて永遠で刈りとることになります。この地上で蒔いたものは、神の前に出る時、刈り取らなければなりません。だから、伝道者は「若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたは、自分の思う道を、また自分の目の見るとおりに歩め。しかし、神がこれらすべてのことにおいて、あなたをさばきに連れて行くことを知っておけ。」との警告を与えているのです。

そして伝道者が、私たちに教える最善の道は、「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。」です。どのぐらい、若い時にでしょうか。若ければ若いほど、早ければ早いほど良いのです。それだけ残りの生涯が豊かになるからです。年配になってから信仰を持った多くの人が「どうしてもっと早く神を信じなかったのだろう」と悔やんでいます。しかし、どんなに高齢になっても遅すぎることはありません。残りの人生を考えたら創造主なる神を覚えた時が若い日なのです。「創造者を覚える」というのは、私を造り、私を生かし、私を救い、私を支えてくださっている神を信じて生活するということです。信仰を持つのは、地上の生涯を終えてからでは遅いのです。その時になってから「神さま、あなたを信じますから、私の罪をゆるしてください」と言っても、その時には神に出会うわけですから、神を信じるも信じないもないのです。神を直接見ることは出来ない今だからこそ、神を信じるか信じないかが問われ、信仰が価値あるものとなるのです。

今日の説教題は「幸いな老い」です。老いることは最初に見たように体が衰えて、気力も萎えてゆくので悲しい辛い体験をされているかもしれません。自分の力の限界さを知らされ、失われてゆくことの多いことを日々感じさせられます。特に死の問題は私が取り組んで解決する問題ではありません。誰かに解決してもらおう以外、道はありません。そして愛なる神様は私たちの死の問題を解決するために主イエス・キリストの十字架による救いの道を開いてくださいました。老いることによる弱さと足りなさからキリストによる救いの道を発見するならこれは「幸いな老い」と言えるのではないのでしょうか？ 救い主イエス・キリストが誕生された時、老人シメオンは「このお方に会えたなら、今までのすべての労苦は報われました。いつ召されても良いです。どうぞ私を主のもとに召してください」と言いました。「あなたの若い日にあなたの創造者を覚えよ。」今日の、この時が、私たちの創造者を信じる日、キリストに従う時であるよう、心から祈ります。